広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「広島ドイツ文学」のデジタル化
Author(s)	武田，智孝
Citation	広島ドイツ文学 , 35 : 83 - 84
Issue Date	2023-02-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053553
Right	Copyright (c) by Author
Relation	

「広島ドイツ文学」のデジタル化

武田　智孝

「Windows 95」が出た前後 3，4 年間は「広島ドイツ文学」がワープロからパソコンに切り替わる過渡期だった。ワープロの活字は機種によってまちまちで，冊子に纏めると見栄えが良くなかった。ソフトを使ってワープロ原稿を Word に置き換えることが出来るようになって，体裁は格段に改善されたが，作業が大変だった。ドイツ語にはウムラウトやエスツェットの壁があったし，変換の過程でいろいろと予期せぬ異変が生じて訂正に手間がかかった。

総合科学部ドイツ語学科で当時パソコンを使いこなせたのは吉田さんと北里さんだけで，毎年この二人に負担を懸けるわけにも行かない。94 年は吉田さんの担当で，次は誰か他にお願いしたいとのことだったが，誰も名乗り出る者がいなかったので，私が手を挙げたら彼は一瞬困惑の表情を浮かべた。私は研究費でパソコンを買ったものの使い方が分からず，これを機会に習い覚えようという魂胆だったから当然の反応である。

不吉な予感は的中して，分からないことが起きるたびに吉田さんを追い廻し，捕まえては訊きまくる次第となった。当時はまだストーカーという言葉はなかったが，まさしくそれである。こんなことなら自分でやった方がよほどマシだったと吉田さんは悔やんだに違いない。たまたま廊下の端に私の姿が見えた途端，向きを変えて逃げ出されたことも度々だった。

吉田さんに地獄の苦しみを味あわせた 10 日余りの後にようやく変換作業を終えたが，まだ元の原稿との照合が残っていた。これはけっこう骨の折れる仕事で悪戦苦闘しているところへ西村さんがドアを叩いて，何かお手伝いすることがありましたら，と入って来られた。私が難儀しているのをどうして察しられたか不思議だったが，大いに助けられた。ワープロ原稿を声に出して読んでもらって訂正するのは，自分一人でやるよりはるかに楽だった。

こうして何とか雑誌の形に仕上がった時はほっとしたが，あらためて見直すと幾つか変換ミスが残っており，投稿者に申し訳ない思いをした。私が気落ちしているのが分かったのか，福嶋さんが鷹野橋商店街に誘ってビールをご馳走して慰めたりねぎらったりしてくれた。丁度区切りの号だったので，「あとがき」に創刊時の思い出を書いたら，いつもは辛口批評ばかりの島屋さんが珍しく褒めてくれたのも覚えている。

変換作業を通してパソコン操作を会得するという所期の目的をある程度は達することが出来て嬉しかったが，それ以上に同僚たちとの貴重な思い出をこの学会誌第 10 号は残してくれた。

その後この同僚たちとの間に些細なことからトラブルが生じて3年ほど学会を辞めていたが，この時も吉田さんからの諫言があって復帰した。その時点ではまだ，この学会誌が定年後の私の人生を支える柱になってくれるとは思っていなかった。

全盛を極めたワープロはやがて廃止され，投稿はパソコン Word に統一されたが，初めの内はフロッピーディスクとプリントアウト原稿を提出することになっていたと記憶する。これは面倒だった。ｅ-ｍａｉｌ添付ファイルで送付すればいいことになったのは今世紀に入って何年か経ってからのことである。

「中四国独文学会」の場合はフロッピーディスクとプリントアウト原稿を簡易書留にして郵送する必要があったから，いっそう煩わしかった。「中四国」も是非広島形式に変えるよう説得したが，当時の当番校はなかなか話が通じず，とうとうむかっ腹を立てて脱会した。短気のせいで，以後私の研究発表機関は「広島ドイツ文学」一つに絞られた。その時「中四国学会」に同時に勧めたのが HP の作成であるが，これも一蹴された。

HP の必要性を感じ始めていた頃，丁度アメリカから娘が帰って来たので，半日がかりで教えてもらいながら作成した，と言ってもほとんどは娘の作である。2008年か9年のことだ。娘が去った後，忘れないうちにと思って自分の HP も作った。

目玉は論文掲載だが，PDF ファイルを載せると負荷がかかり過ぎるので，この時節，大学のどこかに紀要などをデジタル化して保管しておく場がきっとあるはずだと思い，学内の色んな部署に電話して，ようやく図書館の学術情報課にリポジトリというものがあることを突き止めた。広島大学関係の学会誌であれば登録できます，という返事を得たので，すぐさま古川さんに連絡して会議にかけてもらい快諾を得た。リポジトリの URL を利用して 2009 年の 23 号から HP に学会誌掲載論文を載せられるようになった時は嬉しかった。

ただ，その後いろいろ調べてみると，お隣りの「広島大学フランス文学」が広島大学刊行物として電子ジャーナルの形に纏めて登録してある。これだとカッコイイし，HP に載せる時にも URL 一つで済んで便利だし，万一資金が尽きて紙の雑誌が出せなくなっても，オンラインジャーナルとして継続できる。これまた古川さんに頼んだら 2022 年の 34 号から遡って 23 号まで電子ジャーナルの形で登録してもらえるようになった。

21 世紀を 20 世紀以前から区別する最大のものは IT である。日本もコロナ感染対策を機に，各国に比べて IT 活用の遅れが指摘され，デジタル庁まで作ってようやく力を入れ始めたところだ。今後「広島ドイツ文学」のデジタル化に関してどんな進展が見られるか分からないが，吉田さんや古川さんの理解と協力のもと私に出来る範囲のことはやり終えたと思っている。

あとは中身である。執筆者の研鑽は言うまでもないが，見識ある査読者による忌憚ない意見が論文の質を高める。地方の学会誌といえども「紀要」と異なるところは忖度なしの査読の有無である。